

2020年6月21日
聖霊降臨節第4主日

家庭礼拝のための
聖書・牧会祈禱・メッセージ



【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙 15章7節～13節 (新約聖書 295頁)

【牧会祈禱】

命の源である神様

私たちにあなたを信じる思いを与えてくださってありがとうございます。私たちの日常は様々なことが起こります。怒りや憤りに燃えること、与えられることを当たり前だと思ふこと、心が深く落ち込むこと。そのようなことが起こって我を忘れても、信仰を通して神様のもとへと戻ることができます。私たちが迷う時こそ確かに導いてくださることを感謝いたします。

それでも私たちは、傲慢さ、無自覚さによって隣人に対して罪をかさねています。主は隣人の姿をとって私たちの近くにおられますから、それは神様に対して罪を犯していることと同じです。どうか、私たちがあなたをないがしろにしてしまったことをお赦しください。神様は私たちが赦されて生きることを望み、私たちが願うより先に救いをもたらしてくださいました。神様がそのように手をかけてくださるほど、私たちが大切にされていることを思い起こさせてください。

私たちの友の中に、療養生活を送っている人がいます。焦りや不安が募るときですけれども、神様の御業が働く時と信じて過ごすことができますように。新型コロナウイルスによって、不当な苦しみを受けている人々、行き詰まりを感じている人を助けてください。家庭で礼拝を守る友を祝福しててください。あなたの力こそ、すべてのものを越えているはずです。

新しい一週間、私たち自身をおささげします。私たちが忘れて勝手にしても、どうか主がいつも私たちをご自分のものとしていてください。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におささげいたします。アーメン。

【メッセージ】

ローマの信徒への手紙を礼拝の中で読み進めてきました。この後も挨拶や予定などが書かれていますが、今日の箇所が内容の最後と呼べるかもしれません。その最後のメッセージは7節。「だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったよ

うに、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい」ということです。

今日の箇所には「異邦人」という言葉が多く出てきます。今の私たちの感覚からすると、外国人ですとか、外国文化を持つ人、というイメージですが、当時

は違いました。これはユダヤ人が自分以外の民族に対して使っていた蔑称です。異邦人とは、神様の祝福とは無縁の人たち、救いに与ることなど決してない人たちだったのです。そこには蔑み、見下すような思いがはっきりと表れています。

今の言葉で言うならば、落伍者ですとか、失格者になるかもしれません。パウロは9節でこう言います。「異邦人が神をその憐れみゆえにたたえるようになるためです」。つまり、イエス様が来てくださったのは、本来ならば資格のない異邦人までもが救われ、その憐れみを喜ぶようになるためです。神様は、ユダヤ人もそして私たち異邦人も同じだと思ってくださっています。律法を守って生きてきた優等生と、破れかぶれの劣等生、失格者を見境なく、受け入れてくださるので

す。人であるならば、できはしません。「優等生」「劣等生」というレッテルを貼っては、フィルターを通して相手を見てしまいます。人間の本質の輝きや、すべての人間に共通する悲しみ。それらを見ようとするならば、表面上のことなど些末な問題のはずです。けれども、私たちはそうやって周囲にレッテルを貼っては、その人自身というよりも、自分が貼ったレッテル自体だったり、貼ったものが合っているかどうか気に取られてしまいます。

神様は優等生も、劣等生も、そこにあるはずの差さえ気にせず受け入れてくださる。パウロはその神様の働きを、異邦人だけに語ったわけではありません。8節には「わたしは言う。キリストは神の真実を現すために、割礼のある者たちに仕える者となられたのです。それは、先祖たちに対する約束を確証されるためであり…」とあります。ユダヤ人への祝福の源は神様がしてくださった約束です。旧約聖書の時代、神様はアブ

ラハム・ヤコブ・イサクに祝福を約束してくださいました。つまりそれは、彼らがよく生きた、彼らの子孫がよく生きたことへの報酬ではありません。ただ神様がしてくださった約束を、神様が果たしてくださったのです。イエス様はそれを知らせるために彼らに伝えました。

そして、異邦人への救いの源はイエス様の命です。条件も、功績もない。ただ、神様があなたを救いたいと願った。あなたに繋がる罪の鎖、死の恐れ、生きる中で起こる終わりの見えない後悔を断ち切りたい、と神様がそう思われたのです。独り子の命をかけて、実現してしまうほどに。

イエス様は異邦人の主となってくださる。当時のパウロにこれほど新しい発想ができたことに驚きますし、根っからのユダヤ人であったパウロがこう言ったということにも驚きです。しかし、これは神様への降伏かもしれません。以前のパウロは律法を生きることにこだわっていたはずです。そう生きられない者へ苛立ちや呆れが募っていたはずです。イエスを中心とするならず者集団を嫌悪し、粛正し続けた。しかし、神の愛という律法の中心を理解していなかったのは、パウロの方だったのです。祝福とは無縁の異邦人とは自分のことでした。イエス様は異邦人の、この私の救い主となってくださったのです。

今日の聖書の最後は祝福の言葉で終わります。「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆるよろこびと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように」。あなたは希望を持っていい。あなたのやったことによってではなく、ただ神様から受けることによって。パウロはそう伝えています。